

日本製薬産業の先駆者 一一田邊五兵衛商店 のケース一一

安土, 昌一郎

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of
graduate studies

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

131

(終了ページ / End Page)

143

(発行年 / Year)

2014-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010210>

日本製薬産業の先駆者 —田邊五兵衛商店のケース—

経営学研究科 経営学専攻

博士後期課程3年 安士 昌一郎

はじめに

田邊五兵衛商店は現在の田邊三菱製薬株式会社につながる大阪道修町を拠点とする製薬企業である。現在も本社を大阪道修町において活動している。

本論文は、武田薬品工業、塩野義薬品と並ぶ道修町起源の製薬企業である田邊五兵衛商店についての明治・大正期における経営史について論ずる。同時期はわが国の近代的製薬産業が勃興し、大きな変化を遂げた時期であり、同社を構成する要素の解明を通して有益な知見を得ることが出来ると考えている。

日本の製薬産業における先駆者として田邊五兵衛商店を選択し、その先進性を考察する理由を3点挙げる。

まず第1は、幕末維新时期における経営環境の激変に適応しつつ、薬業¹を継続させたことである。田邊五兵衛商店は道修町の薬種商であり、薬品の流通には多くの経験を持っていた。しかし道修町の薬種商は、明治維新がもたらした流通や制度の変革によって既得権益を奪われ経済的に大きな打撃を受けた²。このように困難な選択を迫られた事は、経営者にとって大きな挑戦である。

2つ目は、近代化の流れを乗り切った明治・大正期を含め、300年以上の長期にわたり薬品業界に一定の地歩を築き維持してきたことである。

3つ目は、1877(明治10)年、他に先駆けて薬品製造設備を所有しており、1885年に薬品の工場生産を試みている事である。十二代五兵衛は製薬事業を極めて積極的に推進した。これは同じく早期に製薬を試みた武田薬品工業の薬品製造開始が1895年であり、塩野義製薬のそれが1892年であることから明らかである。また、薬品製造を試みた薬種業者は他にも存在するが、中でも十二代田邊五兵衛は、製薬の実験過程で弟が事故死した後も、実子にその弟の名前を継がせて薬品自家製造を推進するような強いモチベーションとリーダーシップの持ち主であった。

以上の理由から、田邊五兵衛商店を日本製薬産業の先駆者と位置づけ、明治期から大正期にかけてその経営活動について検討を行う。

田邊五兵衛商店に関するこれまでの研究は、松本(2009)で取り上げられているが、その内容は創業から洋薬取扱いまでの経緯と、現代に至るまでの製薬技術史についての記述が主であり、製薬技術史、産業史的側面に焦点を当てたものである。また、網島(2012)では道修町薬種商の集積と、その機能について同業者町研究及び産業集積研究の観点から論じられている。ただし両論文とも、個別企業の事業活動には論及していない。

本論では、日本製薬産業の黎明期において重要な役割を果たした道修町の薬種商を研究開発型企業と捉え、企業家史の観点からその先駆けであった田邊五兵衛商店の事業経営について考察を試みる。

1. 田邊五兵衛商店創業と活動経緯

田邊五兵衛商店は、1678(延宝6)年、初代田邊屋五兵衛が、大阪土佐堀で合薬の振出薬「たなべや薬」³の製造販売を目的として開業した。主要製薬企業の沿革を表1に示したが、これらを見ても分かる通り、田邊五兵衛商店は他の薬種問屋と比較しても創業が古く、薬種業としての長い経験を有している。

享保(1716～1735年)以降、医薬普及を目指した幕府は売薬⁴の製造販売を積極的に奨励し、売薬の種類

によっては町触れを使って宣伝しており、初代五兵衛はそうした時代の流れを早期に察知して独立を図ったと思われる。

ところで、初代田邊屋五兵衛は慶長年間（1519～1615年）、朱印船貿易によって東南アジア方面の硫黄や樟腦を含む薬品原料を生糸や絹織物と共に国内に輸入する事業に従事した田邊屋又左衛門の直系にあたる。又左衛門については『田辺製薬三百五年史』にも詳しい記述が見られる。高収益が見込める半面、1度の航海ごとに必要とされていた朱印状の入手には幕府重臣の紹介推薦が必要であった。渡航準備に莫大な費用を要する朱印船貿易は、ハイリスク・ハイリターンであるが、田邊屋又左衛門の行った貿易は道修町の唐薬市場と深い取引関係を築ききっかけとなり、初代五兵衛の道修町進出に貢献した（田邊製薬株式会社 [1983] 3-4頁）。十二代五兵衛の先進性がこの又左衛門の朱印船貿易と関わっているという具体的な記述は『田辺製薬三百五年史』に見られないものの、大きな費用を投じて新しい事業に取り組むという面で相通じるものがある。

1791（寛政3）年11月、六代五兵衛の時代になると、近江屋九兵衛から株を譲り受け、道修町の薬種中買株仲間⁵に正式に加入している。しかしその前年2月の『唐物改方廻し箱合印形帳』⁶には、田邊屋五兵衛の名前が既に株仲間として連名印に記載されている。これは薬種中買株仲間における条件付き貸株制度によるものと思われるが、六代五兵衛の株仲間加入に向けての努力の結果とも解釈できる。そして1855（安政2）年、十一代五兵衛の時に道修町に新店舗を入手して家持となり、名実ともに道修町の薬種商となった。その十一代五兵衛の後妻の長男が、後に十二代五兵衛となる竹次郎である。先妻との間には男子が無かった。後妻は信仰心が篤く、商家の女性としては稀にみる教養豊かな夫人であり、竹次郎はこの母から深い信仰心と将来に対する鋭い洞察力を受け継いだとの記述が『田辺製薬三百五年史』に見られる（田邊製薬株式会社 [1983] 40頁）。

十二代五兵衛が家督を継いだ1871（明治4）年、薬業界は大変動の最中であつた。江戸享保期に確立された薬種取扱いの独占的地位である株仲間としての特権を失い、開港された横浜や神戸からの輸入品が増加する中で（日本薬史学会編 [1995] 28頁）、長い経験と知識の下に事業を継続させてきた田邊五兵衛商店も、洋薬へ切り替えるか、これまで通り和漢薬一筋を貫くかという岐路に立たされていた。

きわめて潔癖な性格であつたといわれる十二代五兵衛は、薬品の真偽鑑定が必ずしも合理的に行われておらず、取引される薬に含まれる有効成分の量が不揃いであり、砂の付着や水分の多少で計量にも問題が発生し、その上取扱いが煩雑である従来の和漢薬取引の将来性に強い疑問を抱いていた。和漢薬販売に対する不満と、政府による西洋医学の採用という環境の変化の中で、十二代五兵衛は他店に先駆け洋薬の取扱いを開始した。別家の田邊金助と田邊源助が商店の運営に協力し、弟の善三郎と元三郎らと共に、横浜で洋薬を仕入れる傍ら、自らも基礎的な知識を得るため勉学を始める。これらの活動を行った十二代五兵衛商店の関係者を図1にまとめた。

洋薬を取扱う上で信頼しうる日本人貿易商もまだおらず、薬種商として経験も浅かった十二代五兵衛だが、外国商館『二十九番アーレンス商会』の知遇を得て洋薬取引の基礎を学ぶことが出来た⁷。アーレンス商館は横浜から10年遅れて開港し急速に繁栄した神戸にも支店を設置し、田邊五兵衛商店の取引も次第に神戸に集中していくことになる。1872（明治5）年、道修町の旧薬種中買株仲間の中で第一薬種商社が設立されたが、十二代五兵衛は支配人の1人に挙げられ、3年後には新設された薬種商組合の取締に就任している（田邊製薬株式会社 [1983] 45頁）。

また1877（明治10）年、十二代五兵衛は弟の元三郎を援助し、道修町の店舗の裏手の土蔵を改造し簡易な製薬場を作らせた。20坪前後の、実験場というべきものではあつたが、この製薬場は道修町初の薬品製造所であつた。内務省の補助を受けて大日本製薬会社が設立されたのが1885年であり（日本薬史学会 [1995] 46頁）、国内における薬品および製法の基準となる日本薬局方が制定され、製薬業を免許制としたのが1886年であることを考えると、この製薬場設置は先駆的な活動といえる。元三郎は従兄弟2人を助手とし、アルコール、エーテル、アンモニア水、チンキ類の製造に着手した。しかし1879年10月、この製薬場はエーテル製造中の爆発事故によって全焼する。その際、元三郎は全身火傷を負って間もなく死去した。十二代五兵衛は弟の死を悼み、同年8月に生まれた次男の武次郎を分家し、元三郎を襲名させる。そしてこの元三郎が、東京田辺製薬株式会社創始者の初代田邊元三郎となる。

最初の製薬場と弟を失った十二代五兵衛だが、製薬事業を諦めることはなく、1884（明治17）年にふたた

び製薬場を造り、杏仁水、コロダイン、水銀製剤、チンキ類などを製造した。しかし約1年後に再び火災で焼失してしまう。店舗に隣接した不完全な製薬場という不利を認識した十二代五兵衛は1885年、関西経済界の先導者である五代友厚が所有していた精藍工場『朝陽館』を買い取り、解体して得た建設材料と一部の器具類を用い、北区南道心町に独立した製薬工場を建設した。

十二代五兵衛が洋薬を取扱う薬種商としての地位を固めたのは、サリチル酸を国内の酒造家に紹介し、普及させて以後である。1882(明治15)年、アーレンス商会から、ドイツのハイデン社が製造するサリチル酸を清酒防腐剤として取り扱わないかという商談を受けた。サリチル酸は各種医薬に用いられるものだが、欧米では早くから醸造酒の防腐剤としても注目されていた。しかし、日本では内務省の奨めで若干輸入されて一部の酒造家に試用されているに留まっていた。

1880年に、清酒防腐剤としてサリチル酸の使用を推奨していたドイツ出身の化学者コルシュエルトの講話をまとめ、『酒類防腐新説』として出版していた十二代五兵衛は、すぐさまアーレンス商会と交渉して総代理店契約を結んでサリチル酸の一手販売権を獲得すると、別家の田邊源助やその息子源三郎らを伴い灘五郷、伏見方面の酒造家を訪問し、使用法を説明して注文を取った。保守的な傾向の強い酒造家にとってサリチル酸の使用は単なる試みというだけでなく冒険であり、テストを重ねて彼らを納得させていったものの、近畿一円の大口酒造家と各地の小口酒造家への販売地盤を確保する為に10年を費やした。しかし酒造家の要望に応じて乳酸などの醸造用品も併せて売り出したこともあって、販路は広がっていった。

五兵衛商店の取扱ったサリチル酸はハイデン社元封品と自前の商標(日の出に鶴亀と松竹)をあしらった自家小分品で、多く出回ったのは後者の自家品だった。茶色の1ポンド入り紙箱は酒造家の間で『子ズミ箱』と愛称された。溶解が極めて速く、短時間で酒の濁りや酸味が消えることで重宝されたこの子ズミ箱は、発売時期が早く高品質であったため、他の外国製品や国産品が市場に出荷されても優位性が揺るがなかった。

その後、自家製造した水銀製剤各種やチンキ類も含め、十二代田邊五兵衛商店は積極的に洋薬の取扱いを増やし、1887(明治20)年には扱い高のおよそ9割を洋薬の取引が占めた。また、1881(明治14)年度の営業税等級上り金高の調査によると、田邊五兵衛商店は5位である(大阪薬種業誌刊行会[1936]第3巻348頁)。

他社に先駆け活動してきた田邊五兵衛商店⁸だが、同じく早期から洋薬を取扱っていた武田長兵衛商店、塩野義三郎商店と共同で、1890年にヨード製造を目的とした合資会社広業社を設立している。工場は大阪市外の伝法村(現・此花区伝法)にあった煉瓦工場跡地約1200坪を建屋と共に買い取った。瀬戸内、九州、北海道沿岸の海藻を収集してケルプ⁹を現地製造し、伝法工場に送ってヨードを抽出した。事業は順調に成長し、1893(明治26)年に社名を広業合資会社と改称して工場を拡張して、ヨードカリ、ヨードホルム、ヨード曹達などの関連製品も製造するようになった(田邊製薬株式会社[1983]74頁)。

1888(明治21)年4月、偽造された薬品や品質の劣悪な薬品の市場流出を防止するための医薬品検査を目的とする大阪薬品試験会社が道修町の薬業者によって設立されたとき、十二代五兵衛は副社長を務めている。当時最高水準の検査設備を整え、検査担当の技術員に内務省出身の経験者を招くなど、官営の衛生試験所と同等の精度で検査を行うことが可能だった。1893(明治26)年に大阪薬品試験会社に改組し、1898年には大日本製薬合資会社と合併して、社名を大日本製薬株式会社と改称した(田邊製薬株式会社[1983]76-77頁)。

1896(明治29)年、十二代五兵衛を含む道修町の薬業者ら21名が設立発起人となり、優良医薬品の国産化を目指して大阪製薬株式会社を設立した。十二代五兵衛はこの時、取締役役に就任している。西成郡海老江(現・福島区海老江上2丁目)に工場を建設し、技師にはエフェドリンの発見者である長井長義博士の推薦で掘有造が招かれた。1898年10月、大日本製薬会社を買収し、社名を大日本製薬株式会社と改めた。

また関連事業として、1882年に神戸のアーレンス商会から牧牛事業経営を奨められている。健康食品としての牛乳、乳製品の国産化に興味を持った五兵衛は、さっそく弟の善三郎に調査を依頼し、翌年1883年には以前から購入してあった北区南道心町の敷地を利用して、試験的に牧牛を始めている。所有敷地の半分にあたる800坪の敷地で乳牛50頭から60頭を飼育した。道修町の賛同者を得て、1887年には日本牧牛会社を設立して北区(現・大淀区)本庄川崎町に約3000坪の用地を購入して牧場を移転させた。病院をはじめ市内の得意先に牛乳を配達し、その残りや他の牧場から仕入れた分を合わせて、牛乳の加工処理場とした南道心町で、練乳・粉末ミルク・バターなどを製造した。

軍艦印の商標で道修町の店から売り出された乳製品は一時期好評を博したものの、1897（明治30）年に牛疫が大流行して牧牛事業は閉鎖となった。しかしこの本庄牧場は、のちに五兵衛商店の主力製菓工場である本庄工場となる。

また、大阪製菓業史の第2巻には1913（大正2）年に書かれた製菓場訪問記において、田邊五兵衛商店は「道修町菓種商界の巨星」「浪花製菓事業界の巨頭」（大阪製菓同業組合，1943，第2巻142頁）と称されており、販売、製造の双方で高い評価を得ていた事が読み取れる。

表2に十二代五兵衛が引退するまでの、田邊五兵衛商店の活動を年表としてまとめ、彼の活動を概観した。

2. 田邊五兵衛商店の東京進出

田邊五兵衛商店は近畿・西日本地区を営業地域としていたが、業績の伸長に伴い、東京へ進出することを計画した。東京は横浜港に近く洋菓輸入に適した土地であり、首都として急速な発展が見込まれていた上に、北陸・東北地方進出の足掛かりとしても魅力的だった。加えて、日清戦争後は売菓の全国への普及に伴う需要増加によって、地方問屋との取引が活発化し、洋菓を取扱う菓種貿易商も同業組合の下での結束を強めていた。1901（明治34）年初頭、十二代五兵衛は京浜地区の洋菓取引状況の視察に出かけ、日本橋本町3丁目の菓種問屋街に店舗を購入すると、同年7月には当時店務見習中だった分家の元三郎を上京させ、田邊五兵衛商店から分離・独立するかたちで田邊元三郎商店を設立している。田邊五兵衛商店および田邊元三郎商店の連携体制は図2にまとめた。これにより、五兵衛商店と同様、元三郎商店も設立当初は田邊本家の家族および別家となった奉公人のみで経営されていた事が分かる。元三郎は英語に堪能であり、中学生のころはイギリス人宣教師について英語を学び、当時としては珍しくタイプライターも得意であったという（三菱東京製菓株式会社総務部広報グループ [2000] 18頁）。

田邊元三郎商店の開店時、元三郎はまだ22歳であり、補佐役として田邊五兵衛商店から、当時25歳であった別家の田邊金次郎が派遣された。開業時の田邊元三郎商店は、元三郎、金次郎とその他2名の店員という小さい規模で、マルモト（丸の中に書かれた「元」の字）を屋号とした。

3. 田邊元三郎商店の営業活動

創業時、田邊元三郎商店の独立は形式的なものであり、実際は田邊五兵衛商店の東京出店政策の一環だった。元三郎商店は田邊五兵衛商店の全面的な支援を受け、多額の運転資金とともに、商品についても同店から小分けしたものを送ってもらい、初めはそれを仲間売りするという、いわば田邊五兵衛商店の取次の形を取っていた。これには東京市場に出てきた、大阪道修町の他店、および東京の同業者への配慮という一面もあった。次第に東京市内の有力な小売店である脇店や、地方の問屋とも取引を始めるようになっていったが、元三郎商店には倉庫が無く、商品を店の戸棚にしまっていたので取扱量には限度があり、積極的な展開は出来ずにいた。

当時、田邊五兵衛商店では地方部を設けて地方問屋の開拓を始めていたが、関東地区では田邊元三郎商店が全面的に委託される方式を取った。また、横浜の外国商館との取引も元三郎商店開業の大きな目的の一つだった。輸入される菓種は相場の変動が激しく、海外の相場は海外貿易商社から電信でもたらされるので、いかに迅速に相場情報を取得できるかが競争者に勝利する為のポイントであり、関係の深い外国商館との繋がりが重要であった。元三郎商店では以前から五兵衛商店と取引のあったアーレンス商会にアプローチして、サリチル酸の取引を開始した。当時、商館と直接取引をしていたのは、田邊元三郎商店の他には横浜の鳥居徳兵衛商店、友田嘉兵衛商店等少数だったので、元三郎商店は輸入菓種商としての評価を高めていくこととなった。

事業を順調に伸ばしていた元三郎商店だったが、1904（明治37）年2月、日露戦争が勃発して元三郎と金次郎が召集されたため、店には大阪の田邊五兵衛商店から、元三郎の従兄弟と別家の2名が出向した。さらに大日本製菓株式会社の東京支店から支配人を迎えるなど応急の処置が取られ、菓種市況の連絡や官公需要の獲得を行った（三菱東京製菓株式会社総務部広報グループ [2000] 20頁）。これらは当時大日本製菓株式会社の取締役を務めていた十二代五兵衛の指示によるものと思われる。

一方、日露戦争に際し、田邊五兵衛商店は石炭酸やクレオソートを軍需用の消毒薬として多量に納品することに成功する。戦後も水銀製剤や次硝酸ビスマス（顔料、陶器上絵などに用いる）などの製薬事業を強化して、製造者としての性格を強める契機となった。

日露戦争終結と共に帰還して業務に復帰した田邊元三郎と田邊金次郎は、1908（明治41）年に店の奥に隣接した約66平方メートルの住宅を購入し、荷造り場をつくって取扱う品物の量を増やし、製薬事業の開始に備えた。そして1909年になると、東京の三河島に約500平方メートルの土地を借用して、小さな工場を建設し製薬事業を試みた。三河島工場では、当初軟膏類の製造に着手した。これは加藤豊という製薬者が手がけた商品であり、その販売を受託した元三郎商店は加藤を雇用して製造体制を整備し、1912（明治45）年6月には元三郎商店の商標として「オシドリ印」を登録した。この登録商標は元三郎商店のシンボルとなった。

1914（大正3）年7月、第一次世界大戦が勃発した時、扱っていた薬品の大部分がドイツからの輸入品だったため、田邊元三郎商店は薬価暴騰の影響を大きく受ける事となった。さらにその最中、田邊元三郎が1915年10月に脳神経病で入院し、経営を田邊金次郎が引き継いだものの、輸出入業務は一時停止を余儀なくされた。このような状況の中、同年11月に田邊五兵衛商店の斡旋で内藤豊次¹⁰が入社した。

外国商館勤めの経験を持っていた内藤は、ロンドンで発行されている『ケミスト・アンド・ドラギスト』という雑誌の相場欄と日本市場が連動している事を発見し、その情報を薬品輸入に活用した。これは横浜の商館が入手する相場情報よりも早く、情報入手において他社に先駆けた元三郎商店は、薬価の暴騰をビジネスチャンスに変えて自らの立場を優位な物に固めていった。

第一次世界大戦中はドイツからの薬品輸入が途絶えていたものの、イギリスやアメリカからの輸入は続いていた。その最中、ドイツと直接の対戦国だったロシアの商人達が日本で商品を買占めてロシアに送ることで薬品相場はさらに高騰することとなる。田邊元三郎商店も乱れる相場で利益をあげたが、1917（大正6）年にロシア革命が起こってルーブル価が暴落した結果、ロシアへの輸出は結果として欠損となった。しかし日本を中継点とした薬品の輸出が広がっていることに注目し、極東地方の有力商社の住所録を参照して、想定される取引相手に作成した英文の相場表を送付して、東南アジアに進出していたオランダやフランスの商社・薬局や、インド、オーストラリア、南米諸国などに輸出し、ロシア貿易での欠損を上回る売上げを計上した。

第一次世界大戦中の1915（大正4）年5月、三河島工場が拡張され、乳酸、クレオソートなどの製造が開始された。しかし、加藤豊ら製薬者と共同で、東京府足立郡に工場を建設して、局方品¹¹である消炎皮膚薬「イヒチオール」を製造して、田邊元三郎商店の独占的製品として出荷し、アメリカへも輸出したが、原料価格の高騰によって製造を中止せざるを得なくなった。こうした失敗もあったが、本店店舗の土地を買い入れ、翌年も増改築が継続され、経営基盤を強化した元三郎商店は1921（大正10）年、個人営業のかたちを改めて株式会社田邊元三郎商店とした。このように、組織改革を進めた元三郎商店に比べて、田邊五兵衛商店の株式会社化は1933年である。

4. 新薬の創製

第一次世界大戦が終結し、ヨーロッパ各国が復興してその商品がアジア市場に出回るようになると、日本国内で戦後恐慌が発生した。薬業界も例外ではなかったが、新薬・新製剤が相次いで発売され、医薬・売薬の生産額は伸び続けた。局方品が激しい値動きを示すのに対し、新薬の取引価格は一手販売店の裁量に任されているため、市場の影響を受けにくい新薬の開発を目指す企業が多かった（日本薬史学会編 [1995] 64頁）。田邊元三郎商店の新薬第1号も、そうした市場の状況を背景にして生まれた。

また、大正時代は赤痢菌が腸に感染して起きる疫痢という幼児の急性消化器系伝染病が人々を悩ませており、特に死亡率が高かったため幼児を持つ母親に最も恐れられていた。1920（大正9）年の疫痢による乳幼児死亡率は15%前後であり、50年後の1975（昭和50）年と比較すると実に14倍である。東京では疫痢を含む伝染病が毎年のように流行しており、当時の人々の平均寿命も短く、男性42歳、女性43歳という状況であった。

疫痢の治療は発病初期に発見し、乳幼児の腸内容を一扫することが最重要であるとされており、当時は「ヒマシ油」を飲ませる方法が取られたが、このヒマシ油はトウゴマの種子を蒸して絞る為に特有の臭気を発し、

服用しにくいという欠点があった。内藤豊次はこのヒマシ油に注目し、海外の雑誌記事で紹介されていた「アロマティック・キャスターオイル（ヒマシ油）」にヒントを得て、臭気を解決するためにレモンの芳香を加え、シロップで甘く味付けし、25 gのヒマシ油に5 gの芳香剤を加えて1921（大正10）年に市販した。

腸内のカスをロールで絞り出すというイメージから「カスターロール」と命名され、多くの家庭に芳香緩下剤として歓迎されていった。飲みやすい緩下剤という評価は関東から関西まで広まり、大阪でのカスターロールの販売額が、同地で仕入れる商品の金額を超え、新薬の収益性を実証した。

また、田邊元三郎商店からカスターロールが販売された後、同年に外用消炎鎮痛剤サロメチールが発売されており、これが新薬第2号となる。田邊五兵衛商店も、1922（大正11）年に止瀉剤アヂナミンを製造した。

他社の新薬製造販売の例としては、塩野義三郎商店の制酸剤アンタチデン（1909（明治42）年）（塩野義製薬株式会社 [1978] 84頁）、武田長兵衛の解熱・鎮痛剤テピラル（1924（大正13）年）（武田二百年史編纂委員会 [1983] 246頁）が挙げられる。

田邊元三郎商店の活動指標の一つである売上高について1922（大正11）年から1930（昭和5）年までの推移を図3に、また、純利益の推移を図4に示した。これらから、関東大震災の影響を受けたであろう1923（大正12）年を除くと順調に成長したことが分かる。表3に田邊元三郎商店の活動を年表としてまとめ、創業から元三郎の死去までを概観した。

5. まとめ

十二代田邊五兵衛が推進した、他店に先駆ける洋薬取扱い、洋薬製造の開始、新薬の開発など先駆的な経営活動と、彼に主導された田邊元三郎商店の活動について見てきた。

田邊五兵衛商店の、特に十二代五兵衛が店主となってからの先駆性は大きく3つの要素によって支えられてきたと考えられる。

第1に、横浜開港および江戸から明治への変革によって大阪（特に道修町）が打撃を受けたことがあげられる。企業が環境の激変に直面した際、多くの経営者は既存路線を貫くか改革を試みるかの二択を迫られる。そして環境の変化が大きいほど、改革に際して内部の抵抗が少なくなる可能性が高い。

第2に、田邊五兵衛商店が、十二代五兵衛が襲名した時点で、創業から194年という長い歴史を持っていたことが挙げられる。これは長期に渡って組織を維持し発展させた経験を有していたこと、新しい試みによって利益を獲得するという先発の優位性を経験していたことを示している。

そして第3は、十二代五兵衛の「潔癖な」性格である。潔癖な性格というのは経営者を称賛する際に必ずしも一般的に用いられる表現ではないと考えられるが、十二代五兵衛が潔癖であるという記述は資料の随所に見られ、それは和漢薬取引の曖昧性に対して彼が強い疑問を抱いていた事としても表れている。しかし、十二代五兵衛が和漢薬取引においてその強い疑問を元に行動した（取引を明確化させる仕組みを作った、計量の精度を高める工夫をした等）という記述は資料からは読み取れない。五兵衛にとって洋薬取引の開始は、強い不満を覚えながら伝統の制約によって改善の行動を取れなかった和漢薬取引から訣別する上で、望ましい選択だったと考えられる。だからこそ経験も人脈もなかった新事業に乗り出し、商取引だけでなく商品知識の学習も積極的に行ったと考えられる。

潔癖な十二代五兵衛だが、一方で製薬所建設、他商店との共同出資による会社設立、関連事業としての健康食品製造を企図した牧場経営の取り組みなど、柔軟な姿勢も見て取れる。特に洋薬製造への意欲は、その過程で被った、製薬所2件の焼失と実弟の事故死という損害を考えると並々ならぬものがあり、新事業の開拓を強く志向していたことが読み取れる。これについては、彼の母から受け継いだ『田邊製薬三百五年史』にある将来に対する洞察力が大きな役割を果たしていると考えられる。

また、田邊元三郎商店は田邊五兵衛商店の東京における取次店として設立されたものである。人員、資金、商品、情報の面で五兵衛商店からの支援を受けており、元三郎が入院して業務が滞った際も五兵衛商店からの援助を受けており、少なくとも第一次世界大戦中までは五兵衛商店の強い影響下にあった。

しかし元三郎は単なる取次店としての業務を継続するだけでなく、日露戦争終結後に三河島工場を建設して、

外部の製薬者を招いて商品を製造し、独自の商標を使用した。このように、五兵衛商店の影響下にありながらも独立色を強める活動を行っていた。また、五兵衛商店の斡旋を受け入店した内藤豊次の持つ情報収集能力を活用し、薬価が暴騰した第一次世界大戦中において収益を安定させた。

さらに、内藤の立案を発展させた結果、新薬第一号および第二号の開発と発売が実現した。この新薬開発は元三郎の指揮の下に実行されたものであり、結果として五兵衛商店よりも早く自家製新薬を製造している。カスターロールとサロメチールの成功は、元三郎が十二代五兵衛の先駆性を引き継いだ結果と言える。

このように、他店に先駆ける洋薬取扱い、自家製薬の開始、新薬の開発を行ってきた先進的な田邊五兵衛商店であるが、資金調達の円滑化と近代的な組織への変革となる株式会社への改組は、1933（昭和8）年まで遅れた。改組時の資本金は415万円であった。1917（大正7）年に株式会社への改組を果たした武田長兵衛商店、1918（大正8）年に改組した塩野義三郎商店に比較して15年以上後のことである。また、自家製新薬の創製についても塩野義三郎商店や田邊元三郎商店の後であった。

田邊五兵衛商店がなぜ自家製新薬の開発に後れをとり、他社に先駆けて株式会社への改組を実現できなかったかについては、今後の研究で明らかにしていきたい。

¹ 本論文では、製薬事業、薬品の販売を合わせて薬業と呼称する。

² 財政難に悩む新政府から課された御用金、蔵屋敷の撤廃、株仲間の解放、横浜開港による輸入薬種の流通の混乱によって、道修町の薬種商が影響を受けた [塩野義製薬株式会社, 1978] [武田二百年史編纂委員会, 武田二百年史 (本編), 1983]。

³ 各種生薬を配合し、それを刻んで麻や絹の袋に入れ、これに熱湯を注いで浸出したエキスを服用するタイプの商品。発売後も改良が重ねられ、1887（明治20）年まで販売された。

⁴ あらかじめ製造・調査されている市販薬を指す。

⁵ 薬種中買は薬種取扱の専門業者で、形の上では問屋の下部組織。和唐薬を扱う問屋が兼業問屋であったため、薬種取引が盛んになるにつれて専門知識を持つ業者が必要となった。彼らは実際には店舗を構え、問屋と同様の取引を行った。株仲間は、江戸幕府によって擁護された同業者組合。出回る商品の品質管理と市場の間接統制を目的とする。株仲間の構成単位ごと（多くの場合は商店ごと）に営業免許ともいえる株札があり、受札者以外は中買業務（問屋からの入札買）を行えない。株札は幕命によってのみ増減できる。薬種株仲間が公認されたのは1722（享保7）年、8代將軍吉宗の時である [武田二百年史編纂委員会, 武田二百年史 (本編), 1983]。

⁶ 不正唐薬取引のために中買株仲間が当初による摘発法を使って自戒する旨の誓約書 [田辺製薬株式会社, 1983]。

⁷ 知遇も経験もない十二代五兵衛がアーレンス商会との繋がりを得た理由は定かではない。しかし、「五兵衛の性格が非常に律義で、仕入代金の支払も必ず約束の期限の数日前には果たすといった厳しい態度が、アーレンスに好まれたのであろう」（田辺製薬株式会社, 1983, 44頁）という記述から、アーレンス商会との良好な関係を持つことが出来たと推測される。

⁸ 田邊五兵衛商店の先駆性については、五代武田長兵衛の追想録でも触れられている。「自分の所で製造しているとか、昔は道修町で一番古いのは田辺さんです。これは古うおました」（武田和敬翁追想録編纂委員会, 1960, 64頁）。

⁹ 海藻を焼いて灰にしたもので、消毒薬の原料になる。

¹⁰ エーザイの創業者。

¹¹ 日本薬局方に収載されている医薬品のこと。日本薬局方とは、重要あるいは汎用される医薬品について、性状や品質の適正化を図るために品質規格の基準を国で定めた規格書のこと。

文献一覧

網島 聖 [2012] 「近代における同業者町の存続とその意義：明治・大正期の大阪道修町と医薬品産産を事例として」『人文地理』, 第64巻第2号, 123-141頁。

大阪製薬同業組合 [1943] 『大阪製薬業史 第2巻』大阪製薬同業組合事務所。

大阪薬種卸仲買商組合 [1937] 『大阪薬種業誌 第3巻』大阪薬種卸仲買商組合事務所。

塩野義製薬株式会社 [1978] 『シオノギ百年』塩野義製薬株式会社。

武田和敬翁追想録編纂委員会編 [1960] 『武田和敬翁追想』武田和敬翁追想録編纂委員会。

武田二百年史編纂委員会編 [1983] 『武田二百年史 (資料編)』武田薬品工業株式会社。

武田二百年史編纂委員会編 [1983] 『武田二百年史 (本編)』武田薬品工業株式会社。

田辺製薬株式会社社史編纂委員会編 [1983] 『田辺製薬三百五年史』田辺製薬株式会社。

道修町文書保存会 [1993] 『道修町文書目録一近世編一』道修町文書保存会。

二代塩野義三郎伝編纂委員会編 [1961]『二代塩野義三郎伝』塩野義製薬株式会社。

日本医薬品卸業連合会卸薬業史編纂委員会編 [1978]『卸薬業史：連合会 35 年のあゆみ』日本医薬品卸業連合会。

日本薬史学会編 [1995]『日本医薬品産業史』薬事日報社。

松本和男 [2009]「大阪・道修町の製薬産業史：3 世紀続く田辺製薬（株）を事例として」、『化学史研究』，第 36 巻第 2 号，105-106 頁。

三菱東京製薬株式会社総務部広報グループ編 [2000]『東京田辺製薬社史』三菱東京製薬株式会社。

山下麻衣 [2010]『シリーズ情熱の日本経営史⑤医薬を近代化した研究と戦略』芙蓉書房出版。

表2 田邊五兵衛商店年表（十二代五兵衛）

西暦	事項
1870	11代五兵衛、出資して薬種商社永久組社員となる。
1871	11代五兵衛、老齢のため隠居して五郎兵衛と称す。長子竹次郎(1849生23歳)家督を相続し12代五兵衛を襲名)
1872	12代五兵衛、田邊氏を冠姓。道修町に結成された第1薬種商社の支配人に就任。
1873	12代五兵衛、次弟善三郎・末弟元三郎とともに精々舎に入り製薬の研修を始める。
1874	12代五兵衛、田邊元三郎・田邊源助(別家)とともに薬種商組合に加入。
1875	12代五兵衛、薬種商組合の取締に就任(大阪司薬場に報告された洋薬取扱業者23名中に氏名あり。元三郎、司薬場伝習生となり、製薬を研修。
1877	12代五兵衛、開成組組員となる。店舗裏三休橋筋に面した製薬場を設置し元三郎に任せる。
1878	薬種商組合より大阪府宛に、洋薬大量取扱人として6名報告—12代五兵衛を含む。長子五三郎出生。
1879	11代五兵衛歿。次男武次郎出生。店舗裏の製薬場火災で全焼、元三郎負傷後歿。武次郎に元三郎の名跡を継がせる。
1880	12代五兵衛、コルシエルト講『酒類防腐新説』を出版。12代五兵衛、薬種卸仲買副総代に就任。
1881	明治14年度営業税等級上がり金高明細表において年商68,000円(洋薬商3位)。神戸アーレンス商会から独ハイデン社製サリチル酸の一手販売権を取得、日の出鶴亀印サリチル酸として酒造家に販売開始。
1882	道修町有志と牧牛事業開始。北区南同心町に牧場。
1883	店舗裏に製薬場再建。加陽碌平門下の須田政治を迎えるが、再び全焼。(杏仁水、コロダイン、水銀製剤を製造)
1884	北区南同心町の牧場の1部(700坪)に木造製薬場を建設、須田政治を主任として製造開始。(各種水銀製剤、麦角エキス、酢酸カリ製造)
1887	12代五兵衛、薬種卸仲買総取締に就任。日本牧牛会社(資本2万円)設立。
1888	道修町有志と創立した大阪薬品試験会社の副社長に就任。
1889	ヨード製造研究に着手。
1890	武田長兵衛、塩野義三郎らと合資会社(資本1万円)広業舎を創立、工場は市外の伝法村(現此花区伝法)。ヨードを製造。
1893	広業合資会社と改め工場拡張。ヨード、ヨードカリ、ヨードホルム、ヨードソーダ製造。
1895	大阪薬種卸仲買商組合総取締に就任。
1896	大阪製薬株式会社設立、取締役に就任。
1897	日本牧牛会社解散。(牛疫流行のため)
1899	大阪薬品試験株式会社専務取締役に就任。
1901	東京日本橋3丁目に田邊元三郎商店設立。
1903	第5回内国勧業博覧会にサリチル酸等の薬品を出品。翌年に石炭酸、クレオソートを軍需品として大量に納入。
1905	大阪市北区本庄皮川崎町に製薬分工場を設置。水銀製剤増産。
1906	商標「子ズミ箱」登録。サリチル酸の愛称とする。
1910	武田、塩野、春元と共同組合広栄組(資本3万円)設立、酢酸の共同仕入・卸売開始。英国ジンメルマン社と直取引契約、塩化アンモン石炭酸・ホルマリン直輸入開始。
1912	独シェーリング社と神経痛・リュウマチ治療剤アトフェン、アトファニールの国内一手販売契約締結。
1914	女婿田邊碌寿に技術部門主催させる。臨時薬業調査会大阪側調査委員に就任。
1915	ハイデン社サリチル酸輸入途絶。アスピリンから製造。石炭酸からの製造着手。
1916	本庄工場建設(敷地3000坪)エチル炭酸キニーネ・ザロール・クエン酸等製造。12代五兵衛隠居、五三郎13代襲名。

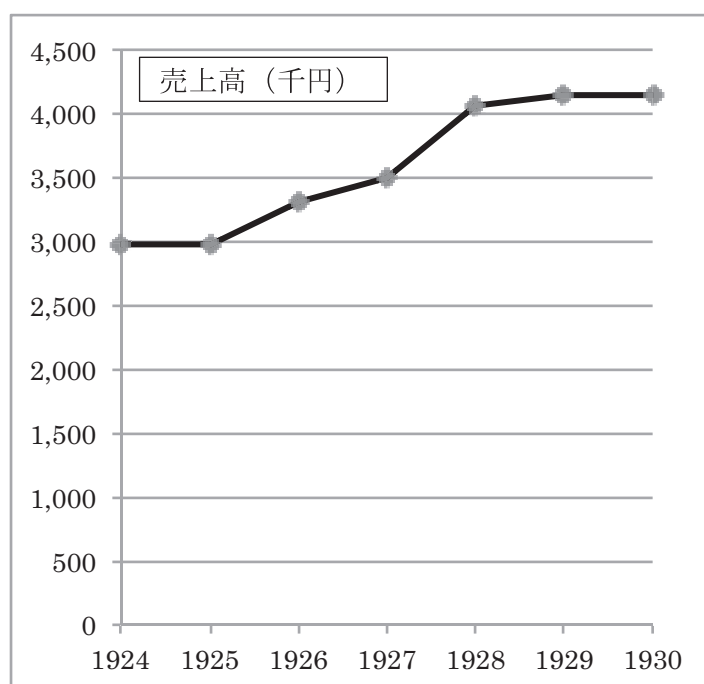
(出所)『田辺製薬三百五年史』から筆者作成

表3 田邊元三郎商店年表（初代元三郎）

西暦	事項
1901	薬種商「田邊元三郎商店」創業。(店印マルモト) 東京市日本橋区本町4丁目。田邊金次郎派遣参加。サリチル酸関東地区販売開始。
1904	元三郎、金次郎、日露戦争に応召のため五兵衛商店が援助。
1906	元三郎、金次郎、復帰。
1908	荷造場を本店隣に設置(敷地買収)
1909	東京府三河島に工場設置(500平米)、軟膏類製造開始。
1912	「オシドリ印」商標登録。
1915	三河島借地など2000平米購入。2階建工場建設、アスピリン、乳酸、クレオソート、テレピン油等製造。元三郎療養のため金次郎が支配人就任。内藤豊次入社。
1920	本店改築竣工。鉄筋3階・520平米。
1921	法人・株式会社田邊元三郎商店に改組。(資本100万円) 代表取締役社長 元三郎、専務 金次郎、取締役 五兵衛。カスターロール、サロメチール新薬として発売。
1923	関東震災で社屋、倉庫、荷造場、全商品消失、三河島工場一部破損。修理しながらの営業再開。
1924	アニマザ(輸入品) 発売。
1925	ランゲリン(輸入品) 発売。
1926	デシチン(輸入品) 発売。
1927	チミッシン発売。
1928	元三郎死去(49歳)。英一郎2代目襲名。

(出所) 『東京田辺製薬社史』 から筆者作成

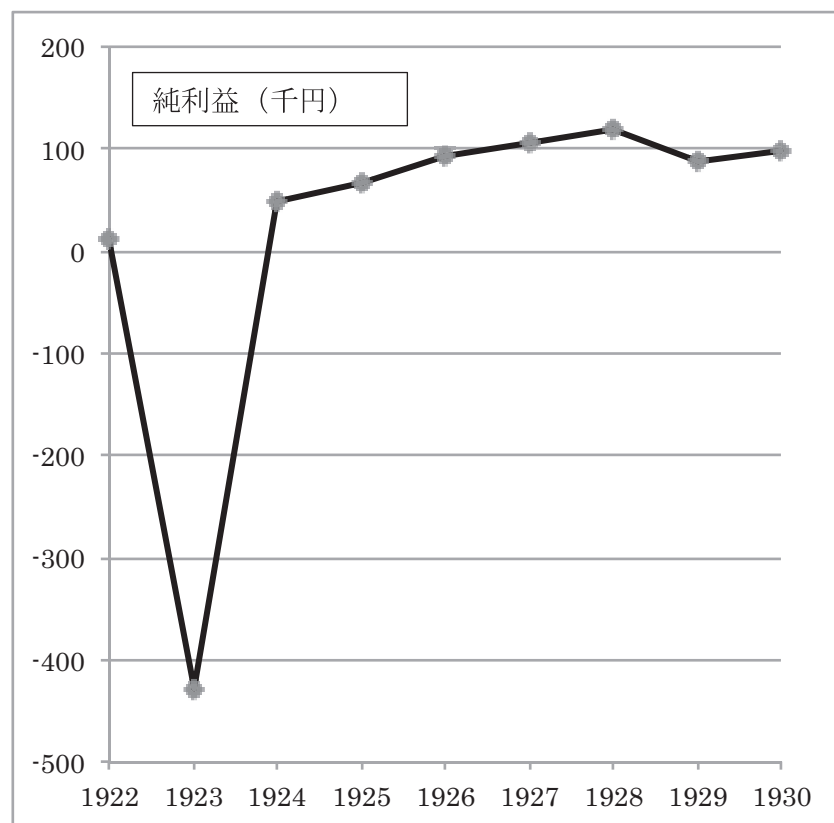
図3 株式会社田邊元三郎商店の売上高推移



(注) 元三郎商店の株式会社化は1921年であるが、社史の記述では1921～1923年の売上高は不明と記されている。

(出所) 『東京田辺製薬社史』 から筆者作成

図4 株式会社田邊元三郎商店の純利益推移



(出所)『東京田邊製薬社史』から筆者作成

